

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 曹 基哲

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・理学専攻

本シンポジウムには第一及び第二回以来、この度5年ぶり三度目の参加となった。各大学担当教員の変わらぬ熱意と努力により、本シンポジウムが両国学生・教員の研究発表および交流の貴重な場となり続けていることに深い感銘を受けた。

1. 研究発表について

日本側学生は英語による口頭発表が初めてのケースが多かったと思われるが、よく準備し、臆すること無く立派に発表を行っていた。課題は研究内容に関してより深い理解を目指すこと。また質疑応答の際によく見られた光景だが、質問されていることが理解できない(英語であろうが、中身自体であろうが)場合に、落ち着いて対処(ゆっくり話してもらうなど)することだが、今後も引き続き英語による研究発表や議論の機会を持ち続けることで自然に向上していくと思われる。

口頭発表は分野別に4つのセッションにわけて行われた。セッション1とセッション4の終了時刻が2時間ほど遅かったのが目立った。参加者の専門分野に偏りがでるのは仕方がないので、これ自体はまったく問題視しないが、分野ごとの参加者数が近いほうが望ましい、との意識はしておいたほうが良いと思われる。

私はセッション2(物理学)に参加したが、5年前には梨花女子大側の発表学生が少ないこと、その学生の発表だけを聞きに他の学生が会場に集まり、発表終了後はすぐにいなくなってしまっていたことが気になっていた。しかし今回、セッション2に関してはそのような事は一切なく、午前に発表した学生達が午後の最後のセッションまで残って日本側学生の発表を聞き、質問も複数回でるなど、積極的に参加していたのが大変好印象だった。

2. 運営について

シンポジウム開催期間には運営上、目立ったトラブルはまったくなく、また滞在期間中に学生の事故が無かった。後者に関しては参加学生自身の自覚の高さと、出発前に注意事項が周知徹底されていたことがよかったのだと思う。期間中、梨花女子大の教員、お手伝いの学生の方々による素晴らしいホスピタリティは5年前に参加したときとまったく変わりなく、感謝申し上げたい。

3. その他

梨花女子大側が期末テスト期間中、という事情を伺っているので難しい意見かも知れないが、学生間で協力して行うイベント(研究でも交流でも)の時間をもう少し作れると良かったと思う。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 森 義仁

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・理学専攻

この日韓3女子大学シンポジウムにおいて、わたしは、今回が初めての参加で、この参加により得た知見を簡単に報告する。

1. 旅行日程

初日1日目早朝出発、最終日3日目夜の帰国で、参加前は過密スケジュールであると思われたが、フライトがおおよそ2時間、都心の羽田空港を使い、また、金浦空港から鉄道で1時間以内には梨花女子大学に到着することができ、短時間の移動時間で、そのための疲れを感じさせないものであった。その分、初日の午後からプログラムがはじまり、2日目は朝から夕方まで、3日目を朝からお昼までの密な交流スケジュールでありながら最後まで余裕をもって参加することができた。3日目の午後、フライトまでの自由時間、何か1つか2つほど、韓国の見聞を深めるには適度な時間であった。わたしは、同行の方の案内で、大改修により高速道路を撤去した清溪川の沿いを実際に歩いてみたことを忘れないであろう。東京都心の河の上から高速道路がなくことなど想像は難しい。

2. 研究発表に関して

わたしは化学部門の口頭発表をすべて聞くことができた。この発表の準備としておそらく練習と工夫を重ねたことであろう、化学分野内でも隔たりが大きな研究課題もあるため、それぞれの発表の序論に工夫を行ったと推察した。そのため、どの発表も研究結果のおもしろさがよく分かる発表であり、素朴な質問をしやすい環境ができていて、学生同士の議論も深まる準備はできていた。また、ポスターセッションは気軽に交流できる機会と思われる。しかし、少し残念に思われることは、このような交流の準備でできているにも関わらず、この学术交流の場所に現れる梨花女子大学の学生は多くはなかった。12月は学期末で、時期の問題かもしれない。それでも口頭発表ではマレーシア、ベトナムから留学生、ポスターでは中国から留学生の活躍が印象的である。

3. 教員交流

昼食、夕食は教員交流のよい機会であった。準備してくだった梨花女子大学の先生方には感謝したい。食事は毎回韓国家庭料理と言う雰囲気であった。学术交流の後であり、教員同士といっても研究分野は離れていることもあり、何を話したらよいのやらと言う落ち着かない空気を、「お互い遠慮なくはなそうじゃないか」というものに変える演出をして下さった。その中で、大学の運営や教育・研究、それが発展して韓国の社会事情まで話をすることができた。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 由良 敬

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・ライフサイエンス専攻

今回のシンポジウムにおいては、第6回に引き続き企画段階から参加させていただいた。ここでは、運営と参加学生の様子について簡単に報告する。

1. 旅程などに関して

今回のシンポジウムは昨年度と同じ時期の12月6日～8日に開催した。今回は、先方の発案で学生発表賞を導入することになった。賞導入のそのおかげで、梨花女子大学の参加学生数を増やすことができた様子である。しかし、それでも学年末試験とシンポジウムがほぼ同時に開催されているために、学生の参加がなかなか増えないようである。この対策として、来年度以降は11月上旬の開催を検討することとした。シンポジウム参加にあたっての旅程にはほとんど無理はなかったと思う。今回は、往復の空港集合時間に遅れる学生が複数名あり少々困ったが、大きな問題は発生せずシンポジウムを無事に終えることができた。

2. 研究発表に関して

今年度も10月初旬から週1回90分間、英語口頭発表とパワーポイントの作成法、および質疑応答の演習を私が火曜日に、松本佳穂子先生が水曜日に開講し、シンポジウム参加学生は、いずれかの演習を履修するようにした。参加学生の発表能力および英語力は、当初は決して高くなかったが、演習の最後には上達が見えてよかった。また出発1週間前にはリハーサルをおこない、6名の学生には口頭発表司会の練習もしてもらった。またシンポジウム当日においては、本学学生5名が口頭発表の司会をつとめた。シンポジウムの口頭発表セッションは昨年同様、4つのセッションで行われた。昨年同様、数学のセッションを組むことができたのは、大変よかった。今回のシンポジウムでは、教員発表が4件、口頭発表が47件、ポスター発表が61件あった。上記発表賞に関しては、参加教員の審査にもとづき、お茶大から3名、日本女子大から3名、梨花女子大から4名の学生を表彰した。私が出席した生物セッションにおいては、今年度も本学と梨花女子大の学生とで、発表能力の差はさほどないと感じた。また、聴衆の学生が口頭発表に対して積極的に質問をするようになったことも重要な点として指摘しておく。シンポジウム全体においては多くの質問が教員からなされたが、今回も学生による質問が数多く見られたのは、大変よかったと思う。しかし、質問に対して適確に回答をする能力を養成することの必要性が再認識された。

3. その他

今年度は、梨花女子大学の理学部長との話し合いをする時間はもてなかった。しかし元薬学部長および理学部の重要な教員と話し合いをする機会があり、来年度もシンポジウムを梨花女子大学で開催することとなった。今年度の担当者である Dong-Hoon Hyun 先生が当面の窓口となってくれることが確認できた。日程や開催方法については、年明けから議論を進める必要がある。今回から導入した学生発表賞は、梨花女子大学側の参加学生を増やすこと、および学生全般の参加意識を高める機能は果たしたと思う。来年度に向けて、より効果的な方法を模索すべきだと思われる。

第7回日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 郡 宏

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・理学専攻

・学生の発表について

日本側、韓国側ともに十分に準備されており、どれもよい発表でした。多くの日本の学生はまだ海外での研究発表の機会をほとんど持てていなかったようなので、このシンポジウムは貴重な経験になったと確信します。しかしながら、私の参加した物理のセッションに関しては、分野の範囲が広すぎて、学生にも教員にも他の研究発表内容があまりわからないことが多かったように思います。そのため、私からは有益な質疑、コメントがあまりできなかったことが残念です。そのような中でも、主に韓国の学生はいくつか質問をしており、感心しました。

・ 学生間交流

日本人学生同士での交流は十分されたと思いますが、日韓では有意義な交流があったようにはあまり思えません。もし学生の交流にも重きを置くのであれば、セッションや懇親会のやりかたをもっと工夫する必要があるかもしれません。

・ 梨花女子大の教員の対応について

すばらしいホスピタリティで、食事に関しても、会議の進行に関しても、何一つ不自由を感じませんでした。また、学生の発表にもやさしい質問をしてくれていました。梨花女子大の教員のみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

・ 発表形式についての1提案

分野ごとのセッションだけでなく、小グループによる研究議論もあってもよいと思いました。例えば5名程度の、出来る限り専門の近い学生のグループにし、そのグループ内で、専門の違う学生にもわかるように時間をかけて研究について説明し、質疑応答、議論するという形式もあり得るように思いました。人数が少なければ、学生は質問もしやすいと思います。教員は必ずしも各グループにいる必要はないと思います。学生たちには自分たちで議論をやっていける力があると思います。